

〔論 文〕

新型コロナウイルスの第一波に 飲み込まれた北イタリア

——アウトブレイクの要因と社会的な影響——

Maurizio Campana

I 初めに

2020年は人類にとって忘れられない年になるだろう。東京五輪に沸く華やかな一年となる筈だったが、ふたを開けてみれば未知のウイルスに怯える一年となった。突然我々の日常が大きく変わり、(著者を含めて)予定を大きく狂わされた人は多かった。

著者は、1年に2回程、故郷がある北イタリア(ミラノ県)に里帰りする事が習慣になっている。今年も2月の末、恒例の一時帰国をしたが、故郷があっという間にパンデミックに飲み込まれ、半年近く大阪に帰れなくなった。

西洋諸国の中で新型コロナウイルスの餌食となった国はイタリアが最初であり、アウトブレイク(集団感染)の舞台となったロンバルディア州に半年近く滞在せざるを得なかった経験から、その要因と社会への影響の程を分析してみたいと思う。

II パンデミックの経緯

公式にイタリア国内での新型コロナウイルスの初症例は1月29日に遡る。ローマ国際空港で2人の中国人観光客の感染が判明した。

新型コロナウイルスがイタリアに再び現れたのは、2月18日のことだった。38歳の男性がコードーニョというイタリア北部の静かな町の病院の救急外来を受診し、新型コロナウイルスに感染していることが発覚したのだ。この患者が新型コロナウイルスの院内感染を引き起こし、これが悪夢の始まりとなった。

そして新型コロナウイルスの感染はロンバルディア州の州都ミラノにまで拡大し、2月21日には16人の患者が新たに見つかった。2月22日にはイタリアでの症例数が79人に増加。3月8日には、アウトブレイクの震源地であるロンバルディア州がロックダウンされた。

その翌日には、イタリア全土で同様の措置が施行され、6000万人以上の人々が隔離下に置かれた。3月11日、ジュゼッペ・コンテ首相はほぼすべての商業活動を禁止した。

1. パンデミックの要因

現時点(2020年11月初頭)では、新型コロナウイルスによる死者数は4万人に迫り、その殆どは2月末～5月の間に遡る。このアウトブレイクの要因は幾つかあるが、以下にこれらを解析する。

2. 全国的な要因

①発見の遅れ

ミラノ国立大学の生物学者のGianguglielmo Zehenderは「アウトブレイクが1月初頭には始まっていたことで大規模に拡大したのだと、現時点では考えられる」¹⁾と述べている。公式に最初のケースは1月29日と定められているが、著者も去年の末から既に「今年は不可思議な肺炎が増えているね、気を付けないと」と友人から聞かされていた。

囁かれていたウイルスの初期上陸の決定的な証拠はリグリア州保健局(Alisa)が集計したデータによって叩き付けられた²⁾。献血ボランティアの12月初頭の血液を複数分析した結果、

新型コロナウイルスへの抗体が発見された。要するに新型コロナウイルスが2ヵ月もノーマーク状態だった事が推測される。Covid19が無症状の人々によって拡散することを示唆する研究結果と一致している。

②政治家による過小評価

パンデミック状態になるまでに、新型コロナウイルスが為政者に過小評価された事も大きな要因となった。連立政権の民主党(PD)のニコラ・ジンガレッティ党首はミラノ市内で食事しながら、イタリア国民にメッセージを発した。「注意すべき状況ではあるが、生活を犠牲にしたりパニックを広めたりすることを避ける」³⁾よう警告し、「ウイルスを恐れず食前酒でも飲みに行きましょう」と呼びかけたのだ。ミラノ市長のジュゼッペ・サーラは、ミラノ市民の恐怖を煽らず励ます「ミラノは止まらない」⁴⁾というキャンペーンを開始した。3月7日、ジンガレッティ党首は自らが新型コロナウイルスに感染したことを公表した。

コンテ首相は1月27日のテレビインタビューで放った言葉「新型コロナウイルスに対して我々は準備は万全、問題ない」⁵⁾は如何に左派連立政権がCovid19の危険性を見誤ったかを物語っている。

③医療崩壊と院内感染

欧州連合(EU)に強いられる緊縮財政で既に弱体化していたイタリアの医療制度はあつという言う間にパンデミックの波に飲み込まれた。最前線にいる医師達が、患者の「津波」に見舞われていると訴えた。なかには毎週の残業が25時間になったという医師がおり、24日間連続で毎日14時間以上働いたという者もいた。一部の医療従事者が感染したことでシフトを組むことが困難になり、長時間勤務が常態化(激震地では14時間以上のシフトは日常茶飯事となり36時間以上の極端な例も見られた⁶⁾)し、労働環境が悪化していったのだ。多数の患者に対応しきれず、人工呼吸器が足りなくなった医療現場で

は、命を助けられる患者を選別する苦渋の決断が迫られる場面が常態化した。

この時期の致死率はコロナ禍史上最悪の10%に迫る(9.9%)程だった⁷⁾。

④北イタリア特有の社会構造(幻想と現実)

世界2位の高齢化率(総人口に対する65歳以上人口の比率)はイタリア社会の大きな特徴である。その中には、当然ながら(若者と比較して)、持病、生活習慣病を患っている者の割合が大きい。つまり、イタリア社会は新型コロナウイルスに対して構造的な脆弱性を持っている訳である。これと同時に若者が祖父母などの高齢者と頻繁に交流する習慣が根付いている事がアウトブレイクの要因とされている⁸⁾。この点に関しては外国人が抱えている(祖父母から孫まで、皆同じ屋根の下で暮らす)イタリア家族のステレオタイプがベースにある。しかし、このような家族形態をよく見かける地域はむしろパンデミックの第一波が及ばなかった南イタリアであり、経済最優先の北イタリアでは老人が介護施設に預けられるケースが多い。事実、ロンバルディア州では新型コロナウイルスで死亡した高齢者の大部分が介護施設内で発生したクラスターが要因である。

3. ロンバルディア州特有の事情

①「ヨーロッパの町工場」が齎した悲劇

州都ミラノはファッションや金融の中心地として有名だが、ロンバルディア州の郊外に出ると、無数の中小企業とその工場が立ち並ぶ。この地域ではヨーロッパ諸国の工業産業に必要不可欠な精密部品が生産される。まさに「EUの町工場」としての役割を果たすこの地域では、外国のナンバープレートを付けた大型トラックの数に驚く。ロックダウン中に北イタリアからの部品が仕入れなくなったドイツの自動車産業が生産ラインを止めざるを得なかった事もこの地域の重要性を物語っている⁹⁾。人の往来が激しいこの地域はパンデミックの際、どこよりも脆さを露呈したのは致し方無い事である。

Mar. 2021

新型コロナウイルスの第一波に飲み込まれた北イタリア

②中国人コミュニティの存在

「一帯一路構想」への参加表明からも明白であるように、イタリアに於ける中国人コミュニティのプレゼンスが異常に強い。そのコミュニティを大まかに①繊維産業に携わる「貧困層」(法外的な重労働で食繋ぐ者達)と②飲食店(中華だけでなく、北イタリアの多くのパル¹⁰⁾は現在中国人によって運営されている)や衣類店を経営する富裕層に分けることが出来る。後者の多くは経済の中心地であるロンバルディア州に滞在しながらビジネス上の理由で本国と往来する。新型コロナウイルスが発祥したとされる地域は中国の武漢である事を考慮すれば、知らないうちに、彼らによって新型コロナウイルスが持ち込まれた事がアウトブレイクの一つの要因(複数考えられる)となった可能性は否定できない。

③地獄絵図と化したベルガモ地域特有の事情

激震地となったロンバルディア州の中では、特にベルガモ市の惨状が群を抜いている。世界遺産¹¹⁾を抱えているこの美しい街の人口は12万人程度であるが、陸軍の軍用トラックが長い列をなして遺体を市外に運ぶシーンは北イタリアの悲劇を世界中に伝えた青写真となった。こ

の地域(ベルガモ市内だけでなく、ベルガモ県を含めて)が地獄と化した理由は主に2つ、A) 地域住民の気質と特異性、B) 突発的なイベントの存在(サッカー観戦)

A) イタリアナンバーワンの「働き者」

ベルガモ県の人々は(ブレシア県と並んで)全国中で最もハードワークを好む人達であるとして知られている。一日中働いた後、友人とパルで集まってアルコール度数40度を超えるグラッパ(grappa)という蒸留酒を飲む。何も恐れず「ハードに働き、ハードに遊ぶ」という豪快さこそがベルガモ人の魅力である。新型コロナウイルスで生産活動を止めるべきかどうかと議論され始めた時期に、この地域の工場等はロックダウンまで稼働を止めなかった。困難極まりない状況に追い込まれても猪突猛進で突き進むベルガモ人の勇敢さが仇となった。

B) サッカー観戦が齎した悲劇

2019年、人口は僅か12万人のこの街のサッカーチーム、アタランタBCが欧州クラブ王者を決めるチャンピオンズリーグの出場を決め、2020年に入ってから快進撃は止まらず、決勝トーナメントに進出した。本来ならホームスタジアムで試合が行われるが、ベルガモのスタジアムはチャンピオンズリーグの規定に合わず、



出所)「L'Eco di Bergamo」(2020.3.21)

写真1 新型コロナウイルスの犠牲者の遺体をベルガモ県外の火葬場に運ぶイタリア陸軍車両の列

アタランタはミラノのサンシーロスタジアムを利用せざるを得なかった。2月19日、ミラノで決勝トーナメント1回戦、パレンシア戦が行われた。ベルガモから人口の3分の1にあたる約4万人がバスでギュウギュウ詰めになりながらミラノまで駆け付けた。地元に残った人間は仲間とバールで集まって「おらがチーム」を鼓舞した。

ベルガモのジョルジオ・ゴーリ市長は、パレンシア戦を指して「このパーティーは生物爆弾だった」と主張。「あの時点では何が起きているのか知らなかった。イタリアで最初の感染が確認されたのは23日だった。ただすでにウイルスが広がっていたのであれば、サン・シーロを訪れた4万人が感染したことになる」との推論を語っていた¹²⁾。

上述の如く、コロナウイルスがイタリア北部に上陸した形跡が12月初頭に遡る事を考慮すれば、「三密のオンパレード」となったこの「ミラノ遠征」はアウトブレイクの引き金になった事は明白である。

Ⅲ コロナと差別

1. 「差別遺伝子」と自己責任論

コロナ禍の世界になってから過剰な同調圧力や部外者に対する差別が世の中に蔓延していると指摘されている。しかし、冷静に分析すべきなのは、これは人間が誰しも持っている側面であり、例えば大量の汗をかいて調子が悪そうな人の傍に近づかないとか、清潔感を著しく欠いている人と物を共有しないとか、コロナに限らず何らかの感染を恐れる気持ちは誰しもが持っている危機回避本能である。

異物であるウイルスが体に侵入することで、自分にその免疫がないなら重篤化し易い。人間は土着のものよりも、外来のものに対してより脆弱である。イタリアでの有名な諺「Mogli e buoi dei paesi tuoi」(牛と嫁は地元から選ぶべし)の通り、昔から人間は外来のものを避ける習性がある。分かりやすく言うと外国人を避け

るとか、ちょっと変わった風貌の人、体に発疹が出ている人を避けるといった本能は私達が生まれ持っている生存安全措置である。

この措置が「誤作動」を起こすと、例えば日本のお盆休みで見られた首都圏からの一時帰郷者に対する排斥や差別につながっていく訳である。

イタリアの場合は、パンデミックの初期段階では中国人を「ウイルス人間」としてからかったり、感染者の「烙印」としての民家の壁にペンキで黒い印をつけたりする行動こそは見られたが、アウトブレイクがあまりにも急激で、そのような行動が鳴りを潜めていった。「いつ自分が感染してもおかしくない」という極限の恐怖状態に置かれた我々の中では、感染者に対して「自業自得」という自己責任論ではなく、同情的な心情がメインになった。

2. 北イタリアと南イタリア、終わらぬ分断

イタリアという国が統一されたのは1861年で、一般的なイメージと違ってその歴史は新しい国家であるアメリカ合衆国よりも浅い。しかし、その一方で現在イタリア共和国と呼ばれている国の土地の上で営まれてきた歴史は長い。その特徴としてはローマ帝国が崩壊した後、ミラノ公国やナポリ王国や、当時として珍しく君子制をとらないヴェネツィアやジェノヴァ共和国のような海洋都市国家まで出現し、様々な小国が入り乱れたり争ったりする歴史である。

長く、都市国家として栄えてきたこの土地は、それぞれの地域に完成度の高い独特の文化や風習を持ち、地元の人たちはそれを誇りに思うとともに、心から愛している。会話の中にも、端々に「自分は**の出身だ」という言葉が出てきて、その郷土意識の強さはイタリア人としてのアイデンティティを遥かに凌ぐのである。

統一が成し遂げられた後でも、経済の中心地であるミラノ、政治の中心地であるローマ、重税に耐えながら生産活動に励む北イタリア人、補助金でのんびりと暮らす南イタリア人、国が現在も大きく二分化されていて、対立が絶えな

Mar. 2021

新型コロナウイルスの第一波に飲み込まれた北イタリア

い。

北と南に横たわっている対立がずっと燻っている状態で、何らかのきっかけで噴き出してしまう。北イタリアで感染者数が広がりつつあった2月半ば（ロックダウン前）南部を観光中の北イタリア発のバスツアーに対して罵声を浴びせる等¹³⁾、北出身の人間に対するあからさまな嫌がらせが急増した。

外出禁止令を伴うロックダウンが全国的にしかれたのは3月9日以降である。その前後、出稼ぎ等で北イタリアに滞在中の南部出身者多数による「駆け込み里帰り」が一時的に見られたが、そのような類の移動も忽ち禁止され、事実上ウイルスが南イタリアの脆弱な医療施設を飲み込む事はなかった。

ロックダウンの解除について色々な議論がされていた4月半ば、仮にロックダウンが解除され、移動の自由が戻っても、北出身者の受け入れに対して南部の州は消極的姿勢を示した。それを物語るのはカンパニア州の州知事 Vincenzo DeLuca「我々カンパニア州は北の州域では壁を作ってやる」¹⁴⁾の（差別を助長する）発言である。

以上のような態度に対して深い憤りを覚えた北イタリア人は多い。「我々を受け入れたくないならご勝手にどうぞ！ついでに北部から南部への援助金を拒否したらどうだ？」というのは我々北イタリア人の偽らざる心境だったと言える。

3. イタリアと日本の違い

以上のように、パンデミックが齎した部外者に対する差別が世界中に広まったと叫ばれているが、この現象に対して多面的で冷静な分析が必要である。先ず我々人間には「部外者を避ける」という側面が内在する事を認識した上で、その地域差を分析する。ここで見極めるべき事は、コロナ以前に差別を助長する「土壌」があるかどうかである。例えば、日本とイタリアのケースでは、事情は大きく違う。日本の場合、普段差別意識が薄い首都圏生活者に対する嫌が

らせが見られた唯一の要因は感染への過剰な恐れであるのに対して、イタリアの場合はパンデミックがイタリア共和国が持っている北部と南部の構造的・人種的な対立を表面化させただけである。勿論、パンデミックがその対立をさらに助長したと言える半面、北と南の一般人から為政者まで、その本音を曝け出す機会にもなったと言える。

Ⅳ 「ソーシャル・ディスタンス」の負の遺産

1. 「親切」という定義の再構築

With コロナの時代に入ってから、「三密」を避ける「ソーシャルディスタンス」を保つようにと日本のみならず全世界中で呼びかけられている。

新型コロナウイルスの更なるアウトブレイクを防ぐために行われているこれらの対策は計り知れない「社会ジレンマ」を生んだ。社会的動物である人間は、稀な例外を除いて¹⁵⁾誰かと一緒にないと生きていけない。自殺が孤独の病気といわれる所以である。命を守る取り組みとして導入された「ソーシャルディスタンス」はそういう意味でもろ刃の剣である。コロナ禍の世界では、肉体的な健康を維持しても精神疾患を患った者の数は計り知れない。

「ビフォアコロナ」の世界では、パーソナルスペースは大体2メートルとされ、職場などではそれ以内の距離に入り、さらに親友や恋人の場合は、50センチ以内の距離の中に入ることでお互いの関係性が共有され、安心感を得る。

新型コロナウイルス感染予防対策とはいえ、これまで仲が良かった人から親友や親戚に至るまで、厳格に2メートル離れて交流するのは、肌感覚で著しい違和感から来る誤解を生む危険性がある。コロナ禍の世界では2メートルという距離は「あなたを大切に思うからこそその距離である」ことをお互いに理解し、生じる違和感に打ち勝たないといけない。相手がとる抑制的な対人距離を評価する態度が必要であると同時

にそれを無視する人を戒めなければならない。

この点に関しては、著者が体験した例を挙げたいと思う。丁度パンデミックが猛威を振るっていた4月に、いここから唐突な訪問があった。インフラの点検に従事している彼は外出禁止令の縛りを受けず、仕事帰りに高齢の父に会いに来た。その訪問を知った母は不快に思い「感染弱者である高齢者にいきなりに会いに来るなんて！無神経だわ！」。訪問を親切な行為の表れとして捉えた父と相手（父）を危険に曝す無謀な行為として捉えた母、ビフォアコロナの「あなたを大事に思うから会いに来る」とコロナ禍の「あなたを大事に思うから敢えて会わない」。まさに「親切さ」という定義の急激な変化が生んだ誤解である。

2. 「スキニシップ形コミュニケーション」の破壊

ソーシャルディスタンスという概念が齎した「負の遺産」の度合いは社会によって異なる。「お辞儀文化」が根付いている日本の社会は元々スキニシップに対して抑制的であり、「ソーシャルディスタンス」が比較的に定着し易かったが、イタリアでは違った。社交の場では勿論、ビジネスの世界に於いても、しっかりとした握手を交わすのは誠心誠意の証である。親密な関係においては、お互いが許し合える距離で話すと同時に、スキニシップで相手に安心感を与えるのは重要である。これが本来のイタリア社会で見られるコミュニケーションプロセスである。

最近、高等学校の校舎の壁には若者のメンタルヘルスを呼び掛ける広告を見かける事がある。その謳い文句は「悩みは口にした瞬間小さくなる」となっている。悩みを抱やすい十代後半の日本の若者に対する自殺防止措置である。

「悩みは口にした瞬間小さくなる」というスローガンをイタリアの文化に置き換えると「スキニシップは悩みを和らげる」となる。身内や友人が深刻な悩みを抱えている時に先ずスキニシップでその不安を和らげる。体が触れ合うような距離にいる事で「あなたは一人じゃない、私

は味方だ」という安心感が得られる。しかしコロナ禍の社会ではこのイタリア人特有の「スキニシップ形コミュニケーション」が破壊された。

3. ソーシャルディスタンスが生んだ世代格差

新型コロナウイルスが人類に与えたダメージは計り知れず、ウイルス感染による死亡者数は単なる氷山の一角にすぎない。感染を恐れ病院通いを中断し、寿命を縮めた者や重い精神疾患を患った者の数は、毎日ニュースで踊る数字の中でカウントされる事はない。近未来にワクチンが出来ても、社会の「コロナ後遺症」を簡単に拭い去ることは出来ないだろう。その中では最も辛い負の遺産は「孤独」である。幸いこの時代は、インターネットやSNSを通じてお互いの様子を画像や音声で確認して、辛うじてつながっている実感を維持する事が出来る。しかし、これは同時に世代格差を助長する結果も生んだ。

著者は出張講義で関西地域の様々な高等学校に赴いた経験がある。辺鄙な田舎のバス停で帰りのバスを待つ高校生がスマホを片手にコミュニケーションをとるシーンを見かけることがある。相手は隣にいるのにSNSと言葉で奇妙な間接と直接の「ハイブリッド会話」を展開する。しかし、これは決して日本若者特有の習慣ではなく、イタリアでも同じ光景に遭遇する。まさに地域差を破壊するグローバリズムが為せる業である。

このようにSNSを中心としたコミュニケーションに慣れ親しんでいるイタリアの若者達は、ロックダウンの孤独を癒す術を持っていた。しかし、日本式にいうと、後期高齢者世代ではIT弱者は多く、ロックダウンは彼らの精神を直撃したのである。

4. 孤独となった高齢者

先述の通り、イタリア人は年寄りから子供まで、皆同じ屋根の下で暮らす事がパンデミックの要因となったと考えるのは、あまりにも短絡的である。外国人が抱えている家族愛に溢れた「イタリアンファミリー」というステレオタイプが残

Mar. 2021

新型コロナウイルスの第一波に飲み込まれた北イタリア

念ながら現実を正確に描いていない。特に感染の激震地となった北イタリアのロンバルディア州では経済が何よりも優先され、介護施設に入れられる老人や独居老人等は大変多い。老老介護の問題を含めて、北イタリアと日本は意外と似ている。日本と違う所があれば、裕福な老人の場合、住み込み外国人ヘルパーや家政婦のお世話になっている者が多い点である（このパターンが一つの感染源になったと思われる¹⁶⁾）。

独居老人であっても、介護施設に居る（比較的に健康体）老人であっても、イタリアの高齢者には2つの拠点を中心とした彼ら独特の交流の場がある。

① パール等を中心としたコミュニティーの存在

イタリアのどの小さな街でもパール等が複数あったりする。ここで頻繁に男性の年金生活者が集まり一緒にトランプを楽しんだり、サッカーや政治の話をしたりする。独居老人であっても自己表現のための場が確保されている訳である。ここは相手の肩に手をかけながら一緒にスポーツ中継を見たりふざけたりする、正にスキンシップ満載のコミュニケーション空間である。

② 街の教会堂を中心としたコミュニティー

言うまでもなく、イタリアのど真ん中にはカトリック教会の総本山であるバチカン市国がある。我々イタリア人は空気と共にキリスト教を吸いながら生活している。この件に関して、昔ヴェネツィア東洋大学 (Universita di Ca'Foscari) 在学時代に、東洋哲学の講義で聞いた言葉が脳裏に浮かぶ。「最近イタリアでは、無宗教と自称する者が増えている。しかし、表面的にそうであっても、我々イタリア人は物心がつく頃からパスタやバルメザンチーズと共にキリスト教を食べて育っていくのである。一般的な無宗教や無神論者とは訳が違う」。

イタリアに限らず、カトリック教徒の国々（スペインや南米等）へ行くとこれらの国民のおおらかさに驚く。「敬虔な信者の割にいい加

減」という違和感を抱いてしまう旅行者も少なくない筈だ。しかし、その根っこには信者としての在り方は日本人が想像しているものとは違うからである。カトリック教徒にとって、神の教えを（ある程度）守る事は無論だが、カトリック教会を大事にする事が大変重要とされている。逆に教会を大切にすれば多少のおおらかさが許される。信者と神はカトリック教会を通しての間接的関係にある。仏教標語を借りれば、魂の救済は「自力本願」ではなくカトリック教会を通しての「他力本願」である。それが故にカトリック教会という巨大なピラミッドの頂きに立つローマ教皇は絶対的な影響力を持つのである。これと違って、プロテスタントの場合、信者と神の間にある「緩衝材」は希薄である（プロテスタントにはカトリック教会のような統一した組織は存在しない）故に、敬虔な信者は「自分を律する」事に重点を置く。

イタリアでは頻繁に教会に足を運ぶ信者層の中には年配者が多い。ヴェネト州では古い諺がある「Co la carne se frusta, l'anema se giusta」（体が劣化すると魂は正しくあろうとする）。その意味は「お迎えが近づいてくると信仰心が強くなる」。「死」を意識せざるを得ない高齢者の心理を描写した諺である。しかし、年配者は頻繁に教会を訪れるのは信仰心だけのためではない。イタリアの街は基本的に教会堂を中心に広がっているから、自然と集会の場となる。そこには年配者のコミュニティーがある。パールで群がる年寄りには男性が多いが、教会を日常的に参拝する者には女性（特に未亡人）が多い。教会堂は彼女らにとって孤独感を癒してくれる大切な場所である。

③ 高齢者特有のコミュニティーの終焉

しかし、3ヶ月も敷かれた外出禁止令によってこの世界は終焉を迎えた。飲食店はテイクアウトや宅配サービスのみが許され、教会堂は門を閉じざるを得なかった。独居老人は「自分が一人である」という現実を叩き付けられ、24時間、孤独と不安に苛まれる事になった。代理装

置として「無観客」礼拝のネット配信を行った教会堂もあるが、万が一それを受信出来る環境を備えている高齢者が居たとしても、それだけで彼らの孤独を癒す事は不可能である。年配者にとって礼拝だけでなく、教会堂という空間自体は必要不可欠である。社交的な営みを事実上禁じられた高齢者の中に精神を病む者が多くあらわれ、コロナを発症しなかったが心を壊した者は数字では計れない。

V コロナと恐怖

2月下旬から3月上旬の3週間、ウイルスの急激なアウトブレイクと共に北イタリアは奈落の底に突き落とされた。死者数はあっと言う間に中国を抜き、我々は世界から取り残された感覚を覚えた。

3月、4月の一番ひどい時期には1日の死者数が919人(3月27日)にも上っていた。北イタリアでは医療崩壊が起こり、高度な治療の対象外となった高齢者は仮設テントで野垂れ死ぬしかなかった。未知のウイルスと初めて相対する医療関係者は手探り状態の治療しか施せず、この時期のイタリアに於ける新型コロナウイルスによる死亡率は10%に迫る勢い(9.9%)で、ロンバルディア州に至っては13.6%という惨状だった¹⁷⁾。特に最も恐ろしかったのは新型コロナウイルスで入院する者の死亡率が6割以上だった事である。救急車に乗せられる＝棺桶に片足を突っ込むという共通認識が広まった。

入院した患者の多くは集中治療室で、一人ひっそり息を引き取ったのだ。コロナ対策の名目で、愛する人に別れを告げる機会を禁じられ、葬儀も禁止された。人の尊厳まで否定するこの厳格な感染防止の取り組みは新型コロナウイルスに対する恐怖感をさらに助長する結果となった。

外出禁止令中でも食料品や情報源である新聞を購入するための最低限の移動は例外的に許された¹⁸⁾。大型通販サイト等は日本程整備されていないイタリアでは、ソーシャルディスタンス

を保ちながら数多くの国民がスーパーの前で長蛇の列を作った。恐怖におののく人々が無口に自分の番を待っている光景は今でも鮮明に脳裏に蘇る。その光景はまるで三途の川を渡る順番を待っている死者の霊のようであった。我々ロンバルディア人を活発な人間から「生きた屍」に変えたのは感染への恐怖と数週間で一変した生活環境のあまりの急激な変化を内面で処理しきれない感情だった。

1. 歴史は繰り返す

ロンバルディア地方は約400年前ペスト(黒死病)に蹂躪された地域として知られている。本来なら400年前の出来事を連想するのは歴史好き等に限定される知的な行いだが、イタリアの場合特殊な事情がある。

イタリアの学校では必修となっている古典作品は2つある。1つはダンテの『神曲』(1472年)、もう1つはマンゾーニの『いいなづけ』(1827年)である。後者は現在の標準語に近い言葉で書かれた最初の小説として位置付けられていて、17世紀のスペイン統治下の北イタリア農民の姿を描いた歴史小説である。結婚を誓った2人が様々な妨げにあい、離れ離れになるが、最後はめでたく結婚する物語である。

そのボリュームのため学生からmattone(赤レンガ→頁数が多いという比喩)として揶揄され、嫌悪感の対象になりがちだが、読書嫌いの学生であっても、時代の風俗、社会、人間を生き生きと蘇らせるマンゾーニの巧みな描写は脳裏に焼き付く。この大河ロマンの中でペストの蔓延などで荒廃を極めるミラノ領内の記述はリアリティに溢れている。

このようにマンゾーニによる17世紀の黒死病の描写を共有している北イタリア人はすぐさま新型コロナウイルスと連想した。一般的に100年前に蔓延したスペイン風邪は全地球規模として最後のパンデミックだったので、新型コロナウイルスとの比較対象になる事は多いが、如何せん我々は学校で習っていない。この点においては義務教育が構成する一般認識の共有性

Mar. 2021

新型コロナウイルスの第一波に飲み込まれた北イタリア



出所)「IsNews ènotizia」(2020.3.27)

写真 2 17 世紀, ペストが蔓延したミラノで遺体を運ぶ monatti 達 (最下層役人)

に驚く。

本来なら飛沫感染するコロナウイルスは死亡率においても感染力においても、ペスト程恐ろしい伝染病ではない。しかし、10%に迫る高い死亡率や身内に対する最期の別れやお葬式等「人間を人間たらしめる儀式」でさえ感染防止の名目で禁じられた事はコロナをペスト同様に恐ろしい病気として誤認された。

特に地獄絵図と化したベルガモ市とその地域の犠牲者を埋葬する場所もなく、イタリア陸軍のトラックが遺体を運ぶ痛ましい映像は世界を震撼させた。この惨状に於いては軍用車両とその運転手をペスト時代のミラノで犠牲者の遺体を台車で運んでいた最下層の役人である monatti を連想させた。

2. ロックダウンとうまく付き合ったイタリア人達

3 ヶ月に及ぶ外出禁止令は不思議な体験だっ

た。最初は自由を剥奪されることに対して抵抗感を覚えるが、感染への恐怖もあって、徐々に慣れていく。食べることにに対して目がないイタリア人は手間暇をかけて料理を作る楽しさを再発見し、主食のパンまで家で焼くようになった(その証拠として小麦粉がスーパーの棚から消えた)。忙しい北イタリア人は(普段とは違う)手の込んだ料理に彩られた食卓を囲みながら家族の絆を確かめ合う機会にした。多忙のせいで敬遠しがちな物の整理や断捨離の機会にもなった。効率重視、「時は金なり」というライフスタイルのロンバルディア人にとって、無駄なものに時間を費やすのは、玄関の外に広がる静かな災いから逃避するための手段となった。

3. 外出禁止令を誤魔化す

イタリア人は「誤魔化しの天才」として世界中に認知されている。この不名誉なあだ名の根っこにあるのは、政府や役人は信用出来ない

から自主的に判断し行動する事にある。お役所が納得がいけない規則を作るものなら、どのようにそれに対処するか知恵を凝らすのはある意味で国民的スポーツのようなものである。

外出禁止令に3ヶ月も耐え抜いたイタリア人だが、実を言うと一人一人は自分なりに外出の機会を捻出したのである。例えば著者がお世話になっている理髪店のマスターは「1週間に1回、店舗のメンテナンスの名目で外出許可書を書いて外出していたよ。自宅と店舗の間の道は丁度いい散歩コースになった」、「メンテナンス？ そんなもの要らないよ！ 一人だし、2ヵ月に1回で十分だよ、しかし警察にはそんな事が分かる訳ないからね」と僕に語った。個人事業主が多いイタリアでは、外出禁止令を逆手にとって、もぬけの殻となっていた街並みを堪能した者が少なくない。

4. 恐怖が齎したストックホルムシンドローム¹⁹⁾

不思議な事に長期に渡って実施されたロックダウンが解除され、再び外出が可能になった時、躊躇った国民も居た。世界中で爆発的な感染を見せる新型コロナウイルスに対して自宅はシェルターと化した。外出禁止令がストックホルム症候群のような不思議な心理を産み、いつの間にか隔離措置がそこまで悪くないのでは？ と考えるようになった国民も現れた(元々ラタク気質の著者もその一人である)。我々は悲惨な現実から目を背けていたのかもしれない。大きな社会混乱等を体験した事がない70年代以降に生まれた世代にとって、初めての重大な出来事であり、コロナ禍の世界が齎す大きな変化にどこかで我々は(現在も)恐れているのはその根幹にある。

VI 終わりに

1. イタリアは劣等生から優等生に変わったのは政府のお陰ではない

西洋では初めて新型コロナウイルスの餌食になり、大量の死者を出したイタリアは正に「コ

ロナ時代の劣等生」として世界から揶揄された。しかし、他の欧米諸国が次々とコロナの「津波」に飲み込まれる中、(完全ではないにしても)いち早く感染拡大の封じ込めに成功したイタリアは転じて「コロナ時代の優等生」として称賛されるようになった²⁰⁾。

しかし、勘違いしてはならないのは、イタリアがパンデミックの悪夢から一時的に(第二波はどうなるか現時点では不明)抜け出せたのは国民の涙ぐましい努力のお陰であり、決して無能な政府のお陰ではない。特に現在、イタリア人は戦後最も未熟な政府を相手にせざるを得ない²¹⁾。例えば、2020年に入ってから全国の学校は正常に動いたのは3ヶ月弱程、それ以降は遠隔授業が続いている(日本ほどIT環境は整備されていないイタリアではリモート教育は事実上ほぼ休校を意味する)。11月の現時点でも遠隔授業が継続している。コロナの名目で国民から教育の機会を奪ったり、社会全体を止めたりするのは簡単だが、有能な政治家ならコロナ禍時代と人間社会のベーシックな営みをどのように両立させるのかについて模索するべきある。

2. 「イタリアンミラクル」を可能たらしめたものは主に2つ

①感染への恐怖が齎した意識改革

先述の如く、一時ロンバルディア州の新型コロナウイルスによる死亡率は15%弱まで上がり、医療崩壊の中で「感染＝死」の状態は2ヵ月も続いた。突然地獄に叩き付けられたら人間は最初面食らうが、後に必死に這い上がろうとする。元々イタリアという国では色々な事が上手く機能せず、誰かが何かしてくれるのを待っていてもダメだから、自主的に考えて自分なんとかする習慣が出来ている。特にあれだけの恐怖に見舞われたものだから、感染しないために細心の注意を払った。ロンバルディアの人はすんなりマスクの義務付け²²⁾を受け入れた理由もそれである。

②壊滅寸前の経済への悪影響を避ける

Mar. 2021

新型コロナウイルスの第一波に飲み込まれた北イタリア

元々イタリアの経済はEUに押し付けられた緊縮財政のせいで弱体化の一步をたどっていた。パンデミックが重なり、ロックダウン後経済は壊滅的な状態にあった。生産活動の中心である北イタリアの人間は再びあのような状態にならないように細心の注意を心掛けるようになった。

VII コロナ第二波の展望

1. 第一波との違い

2020年11月初頭の現在では一日に於ける新型コロナウイルスによる死亡者数は再び三桁に上るようになり、再び予断を許さない状況になりつつあるイタリアだが、第一波とは構造が異なる。

2月～4月にイタリアを直撃したパンデミックは北イタリアに留まった(マルケ州の例外を除いて)。第一波では感染例が少なかった南部では現在アウトブレイクが発生している。北イタリアと違って、「Covid19地獄」が未体験である南部では感染への恐怖は希薄である。この地域が「第二波」の餌食になった理由はそこにある。

無論、北部は第二波に於いてオアシス的な存在ではない。①ヨーロッパの町工場的な存在故に、人の往来が多い②人口密度の高さ(特に20州の中で、ロンバルディア州だけに全国の人口<6035万人>の約6分の1<1006万人>が集中している)という特徴を考慮すれば、北イタリアは新型コロナウイルスに対して構造的な脆弱性を持っている。しかし、第一波で高い犠牲を支払った我々は色々学び、一時崩壊した医療現場でもCovid19はもはや未知のウイルスではない。これからどのようにこの厄介な「見えざる隣人」と共存しつつ社会活動を営むかは、体験者の我々に叩き付けられている課題である。

2. 高齢者を如何にいたわるか

現時点では、再びロックダウンを導入すべきかどうか議論されているが、一つの案としては70歳以上の高齢者の外出を禁じる案が浮上し

ている²³⁾。これはロックダウン中に高齢者が置かれていた状況を全く配慮していない、短絡的な考え方に過ぎない。再び高齢者の外出を禁じるのは2面に於いて、望ましくない。

①脳機能の低下

上述の如く、独居老人や介護施設に居る老人が多いイタリアでは、彼らの交流の場である、パールと教会堂を中心としたコミュニティが大変な役割を果たす。家で一人で居ても、社交の場がある事は、孤独への不安を和らげるだけでなく、脳機能の維持するために必要不可欠である。

②寝たきり高齢者の急増

老人を再び「自宅軟禁」する事は、事実上彼らから運動の機会を再び奪うという事になる。「仲間に会いたい」という理由があれば、健脚でなくても杖を曳いてでも外出する年配者だが、外出禁止は「動くために努力する」というモチベーションをも奪ってしまう。確かに、ロックダウン中に自宅でトレーニングに励んだ若者や中年は多いが、ルームランナー等を家で完備している「オーバー70」はほぼ皆無である事を考えれば、彼らを幽閉する事は寝たきり高齢者を大量に生み出す危険性を孕んでいる。

この愚策は毎日更新される新型コロナウイルス関連数字を支持率と連動させてしまう現政権を象徴するものである。数字ばかりに目を奪われると、「生身の人間」のためになる政策は立案出来ない。新たなロックダウンへの批判を避けるために、感染弱者の高齢者のみを自宅軟禁するのはあまりにも短絡的であり、そこに潜んでいる危険性を無視したものである。

第二の高齢者大国であるイタリア共和国が戦争の荒廃から第5位の経済大国にまでなれた(現8位)のは、現年金受給者の涙ぐましい努力があったからである。その恩を忘れ、高齢者となった彼らを不要品として扱うのは成熟した国家の品格にそぐわない。

注

- 1) Gianguglielmo Zehender 「Genomic characterization and phylogenetic analysis of SARS-COV-2 in Italy」Journal of medical virology 2020/3/29
- 2) Filippo Ansaldi (Alisa 支局長)「Coronavirus: “primi casi Covid in Liguria già a dicembre”. L’annuncio del dott. Ansaldi (Alisa). “Tre studi diversi lo confermano”」
<https://www.imperiapost.it/447449/coronavirus-primi-casi-covid-in-liguria-gia-a-dicembre-lannuncio-del-dott-ansaldi-alisa-tre-studi-diversi-lo-confermano>
- 3) Repubblica.it 2020/02/27
https://www.repubblica.it/politica/2020/02/27/news/coronavirus_zingaretti_contro_il-panico-249718891/
- 4) www.ilfattoquotidiano.it 2020/02/27
<https://www.ilfattoquotidiano.it/2020/02/27/coronavirus-non-abbiamo-paura-milano-non-si-ferma-lo-spot-del-sindaco-sala/5718876/>
- 5) <https://www.youtube.com/watch?v=Vir9VhjCr6A>
- 6) Christian Donelli「Turni anche di 36 ore consecutive: non siamo eroi, la tuta nasconde le nostre lacrime」ParmaToday.it 2020/4/18
<https://www.parmatoday.it/attualita/coronavirus-intervista-medico-fidenza.html>
- 7) Matteo Villa 「Coronavirus in Italia, qual è la vera letalità?」Corriere della Sera.It 2020/3/27
https://www.corriere.it/salute/malattie_infettive/20_marzo_27/studio-ispi-ecco-qual-vera-letalita-covid-19-italia-b95d19cc-7029-11ea-82c1-be2d421e9f6b.shtml
- 8) Feberico Garau Gli studiosi: 「In Italia troppe interazioni giovani-anziani」Il Giornale it 2020/3/21
<https://www.ilgiornale.it/news/cronache/coronavirus-studiosi-italia-troppe-interazioni-giovani-1844276.html>
- 9) Rosario Murgida 「Le Case tedesche alla Merkel: “Senza l’Italia non si riparte”」quattroruote 2020/4/6
https://www.quattroruote.it/news/industria-finanza/2020/04/06/coronavirus_le_case_auto_tedesche_senza_la_componentistica_italiana_non_si_riparte.html
- 10) バール (Bar) 軽食喫茶店に近い存在。元々カウンターで立ち飲むスタイルの喫茶店だが、現在テーブル席を整備しているバールが大多数。パリスタがエスプレッソやカプチーノなどを作って提供する。朝食代わりにしたり仕事帰りなどに気軽に立ち寄って一杯飲んでいく光景はまさにイタリアの文化そのものである。イタリアでは社会交流の場としての重要な役割も果たす。夕食後の晩酌等のために訪れる人も多い。
- 11) 16-17世紀ヴェネツィア共和国建造の軍事防御設備, 2017年登録
- 12) Giorio Gori 「“Atalanta-Valencia in Champions? Una bomba biologica”」Tuttosport.com 2020/3/25
https://www.tuttosport.com/news/calcio/champions-league/2020/03/25-68187954/coronavirus_gori_atalanta-valencia_in_champions_una_bomba_biologica/
- 13) Fabio Marcomin 「Il MURO del Sud contro il Nord: la riconoscenza non è di questo Paese」Milanocittastato 2020/4/21
<https://www.milanocittastato.it/featured/il-muro-del-sud-contro-il-nord/>
- 14) Mattiano Pappalardo 「FASE 2 Il muro di De Luca」Il mattino it 2020/4/18
- 15) CNN ジャパン 「コロナ禍で外出制限, イタリアの「世捨て人」が贈るアドバイス」2020/4/26
https://www.cnn.co.jp/travel/35152788.html?fbclid=IwAR2O9tk_C_Cex3SxLSCYT072deTKaTZ04ihquhjFtC8t2gBWMljg7i6CfZc
- 16) 介護や家事手伝い等に従事する者の9割以上は外国人労働者で占められている。これら発展途出国出身者の出稼ぎ労働者は雇い主の高圧的な態度に曝されるケースが少なくない事もある。コミュニティとしての団結力が強い。それは皮肉にも無症状感染者を増やす原因になったと思われる。
- 17) Matteo Villa 「Coronavirus in Italia, qual è la vera letalità?」Corriere della Sera.It 2020/3/27
https://www.corriere.it/salute/malattie_infettive/20_marzo_27/studio-ispi-ecco-qual-vera-letalita-covid-19-italia-b95d19cc-7029-11ea-82c1-be2d421e9f6b.shtml
- 18) やむを得ぬ事情で外出が必要になる場合, 外出許可書の持参が必要。
- 19) ストックホルム症候群 誘拐事件や監禁事件などの被害者が, 犯人と長い時間を共にすることにより, 犯人に過度の連帯感や好意的な感情を抱く現象。ストックホルム症候群。1973年にストックホルムで起きた人質立てこもり事件で, 人質が犯人に協力する行動を取ったことから付いた名称。(デジタル大辞泉)
- 20) 菅野 泰夫 「新型コロナウイルス感染再拡大が続く欧州ロックダウン優等生のイタリア, 劣等生の英国」大和研究グループ 2020/9/25
https://www.dir.co.jp/report/research/economics/europe/20200925_021790.html

Mar. 2021

新型コロナウイルスの第一波に飲み込まれた北イタリア

- 21) コンテ首相に至っては彼は単なる法学教授であり、国民に選ばれた議員ですらない。連立政権のデリケートなバランスを壊さないために、選出された傀儡首相にすぎない。まるで小沢一郎の政治哲学「神輿は軽い方がいい」を具現化したかのようである。
- 22) 外出の際、マスクを義務付けるロンバルディア州独自の法令。2020年3月21日から実施。
- 23) Federico Garau 「Spunta il piano per gli over 70: stretta sui centri commerciali」Il Giornale It 2020/11/1
<https://www.ilgiornale.it/news/politica/riunione-regioni-chiesto-limitare-spostamenti-over-70-1900329.html>

参考文献

- Giuseppe De Lorenzo, Andrea Indini *Il libro nero del coronavirus. Retrosceca e segreti della pandemia che ha sconvolto l'Italia*
Historica Edizioni (2020/7/25)
- Enrica Perucchietti, Luca D'Auria *Coronavirus - Il nemico invisibile: La minaccia globale, il paradigma della paura e la militarizzazione del paese.*
Uno Editore (2020/4/20)
- Leonardo Facco, Lao Tse *Coronavirus: stato di*

paura. La storia controversa e documentata di una pandemia

goWare, Tramedoro (2020/7/6)

Sonia Savioli *Il giallo del Coronavirus. Una pandemia nella società del controllo* Arianna Editrice (2020/9/15)

Giulio Tarro *COVID Il virus della paura*
ilmiolibro self publishing (2020/6/9)

Roberto Volpi *Coronavirus Covid-19. No! Non è andato tutto bene*
Il Leone Verde (2020/6/24)

Fulvio Grimaldi *Cambiare il mondo con un virus. Geopolitica di un'infezione*
Zambon Editore (2020/4/27)

Joseph Tritto *Cina Covid-19. La chimera che ha cambiato il mondo*
Cantagalli (2020/8/12)

Murayama, Aya 「コロナ禍における差別と不寛容：社会心理学の視点」近畿大学 2020/07/01

神馬征峰 「新型コロナウイルス感染症 ―ヘルスプロモーションの役割―」

Japanese Journal of Health Education and Promotion
28 (2): 69-71 (2020)

(2020年11月19日掲載決定)